

王朝和歌にみる桜

花の色はうつりにけりな
いたずらに 我が身世にふ
るながめせしまに

花さそふ 嵐の庭の 雪ならで
ふりゆくものは わが身なりけり

もろともに あわれとおもへ 山桜
花よりほかに 知る人もなし

人はいさ 心もしらず ふるさとは
花ぞ昔の 香にほひける

ひさかたの光のどけき 春の日に

静心なく 花の散るら